

レシマンのロシア語詩について

—レシマン研究ノートから—

長谷見 一 雄

1

ロシア象徴主義の運動が当時の西欧の文学と密接な関係を持っていたことは、しばしば指摘される所である。その端的な例を代表的な象徴派の雑誌『天秤』^{ツェスィ}に求めれば、そこにはフランス、ベルギー、ドイツなどからの数多くの寄稿者の名前を見出すことができるが、それと並行して、スラヴ圏の文学とのつながりも考慮に値するわけで、さほどの運動の中で重要な役割を果たしたとは言えないにせよ、同じ雑誌の中に、作家プシブィシェフスキと、詩人レシマンの、二人のポーランド人の名前を数えることができる。⁽¹⁾このことは、スラヴ圏の中では比較的早く、ロシアとポーランドにおいて、いわゆるモダニズムの運動が、並行して起ったことと無関係ではないが、このうち、レシマンは、他の外国人たちがロシア語への翻訳によって紹介されたのに対し、自ら、母国語であるポーランド語ではなく、外国語であるロシア語で、いくつかの詩篇を残した点で、注目すべき存在である。しかも、これらの詩篇の出来映えは、外国人による手すさびの域にとどまるものではなく、アメリカのレシマン研究家、R・ストーン女史に、当時の「詩人にとっては、ポーランド語よりもロシア語による方が、自分の思想を明確化することが多分容易だ⁽²⁾」と推測させるほどのものであった。

ところで、レシマンという詩人の存在は、実は、ロシア象徴主義の歴史の中のこのような挿話として片付けるほど小さなものではなく、ポーランドのモダニズム運動（「若きポーランド」の名で呼ばれ、ロシアにおける「象徴主義」とはいくつか差異が見られるが）の流れの中での一方の巨大な源流として、その重要性が近年ますます見直されている。その間の事情については後に簡単に触れるつもりであるが、現在の筆者にはまだレシマンの全体像を提出する力量はなく、その準備のための手がかりとして、ここでは彼の創作活動の初期に属するロシア語詩の問題に、考察の範囲を限定せざるを得なかった。

そこで、本稿では、まずポーランドにおける研究成果、および前記ストーン⁽³⁾の著書などによりつつ、レシマンの生涯について、主にロシアとの関わりを中心にして、ロシア語詩を書くに至った経緯にも触れながら簡単に述べ、次に、主としてポーランド文献の入手・閲覧の困難なことによる制約はあるものの、彼のロシア語詩そのものについて論ずることとしたい。

2

ボレスワフ・レシマン（本名、レスマン）は1877年、ワルシャワに生まれた——この、何の変哲もない伝記風の記述の最初の第一行に、既に問題が含まれている。まず名前についてであるがレシマンの先祖はユダヤ人の血をひいていると言われ、レスマンという本名からはそのことが比較的容易に知られるのである。しかし、レシマンという筆名の由来には諸説あるものの、⁽³⁾この筆名からはユダヤ系ということは想像し難い。また、生年については、生前、レシマン自身は78年と書簡の中で述べているほか、⁽⁴⁾ワルシャワの彼の墓碑には79年と記されているなど混乱が見られるが、近年、一応77年とする説が有力である。⁽⁵⁾

ところで、幼時に両親が別居したため、レシマンは父とともにキエフへ赴くこととなる。以

後、キエフ大学法学部を卒業するまでの時期をこの地で過ごすこととなるのだが（いわゆる「ウクライナ時代」）、幼、少、青年期をロシア、それもウクライナの自然の中で送ったことが、レシマン理解にとって非常に重要なポイントとなってくる。チシュナデルは後年のレシマンの回想的発言を引いて、彼をポーランド文学史に連綿として流れる「ウクライナ派」の最後の詩人の一人に数えている。また、レシマンはチュッチェフ、フェートを始めとするロシア詩人の作品にも広く親しんでおり、当時新進の詩人であったバリモントともキエフで会ったという推測がなされている。⁽⁶⁾

レシマンは少年時代から詩作を始めたとされるが、この頃作品に親しんだ文学者としては、既に述べたロシア詩人のほかに、ミツケヴィチ、スウォヴェツキなどのポーランド・ロマン派、ボードレー、ヴェルレーヌ（後に翻訳を試みる）、ボードレーを経由してのポー（後に多くの短篇を翻訳・刊行する）などが挙げられる。このうちポーに関しては、レシマンを中心としたいいくつかの興味深い文学史的事実が目にとまったので、以下に記しておこう。一つは、後にまた触れるが、ポーの詩のロシア語への翻訳者の一人でもあったバリモントとの交友である。もう一つは、スラヴ圏において最も早い時期にポーに関心を持っていたとされる。ポーランド・ロマン派の詩人、F・ファレンスキとの文学史的關係である。ファレンスキはその詩における非常に大胆な着想によって、しばしばレシマンの先駆的存在とされるが、そのほかに、ファレンスキの散文作品『遠くからと近くから』におびただしく現われるロシア語風語法、ないしロシア語なまりにも、レシマンと通ずるものが含まれているように思われるのである。⁽⁷⁾

さて、大学卒業後しばらくして、レシマンは外国へ出る。1906年までパリに居を定め、また結婚することになるが、バリモントと交友を結ぶのもこの地のことである。レシマンは既に詩人として出発していたが、後に発表されるロシア語詩を書くのもこの時期に重なっている。この経緯をめぐって、ストーンは二つの面白い説を紹介している。⁽⁸⁾一つは、バリモントがレシマンに、ロシア語詩一篇につきルーブルを支払うと申し出たという説である。もう一つは、父方にポーランド貴族の家系を持つ、後の亡命ロシア詩人、ヴラジスラフ・ホダセーヴィチとレシマンが、それぞれ、ポーランド語とロシア語で詩を書くことを競う文学的賭けを行なった、という説である。⁽⁹⁾

いずれにせよ、レシマンは少なくとも二つのロシア語による連作詩を書く。1906年、モスクワの雑誌『金羊毛』第11～12号に発表された、五篇から成る『いと賢きヴァシリサの歌』（以下『歌』と略称する）と、1907年にやはりモスクワの雑誌『天秤』の第10号に発表された、六篇から成る『月の酔い』がそれである。これらは今日、ポーランドで出版されたレシマンの作品集によっても読むことができるので、以下で引用する場合はこの刊本による（引用個所の指示は省略する）。なお、このほかにストーンによれば、雑誌『峠』（1906年から7年まで続いたモスクワの雑誌で、革命後の同名の文集とは別物である）に1907年、『生きている波』という詩が発表されたということであるが、筆者は未見である。また、ほかにレシマンのロシア語作品としては、手稿のまま発表されずに失われた戯曲『ヴァシリイ・ブスラエフ』があり、ほかにもいくつか未発見の作品の存在が推測されている。⁽¹⁰⁾

パリでレシマンは、バリモントを通じてメレシコフスキ、ジナイーダ・ギッピーウス、ボリス・ザイツェフ、ミンスキイ、アレクサンドル・ベヌア、ベールイといったロシア象徴主義時代を代表する文学者たちに会っている。このような交友関係、および、『金羊毛』、『天秤』という当時の象徴派の代表的な雑誌に作品が掲載されたという、一種の文学的成功からも、レシマ

ンとロシア象徴派との強いつながりは容易にうかがうことができよう。

このような時期を経て、レシマンは1907年にポーランドに戻るが（以後も何度かパリなどに出る）、その後、第一次世界大戦勃発までの時代（正確には1910年から15年まで）、いわゆる「パリ時代」末期は、レシマンにとって「例外的に多産な⁽¹⁵⁾」時代となる。しかし、以後の彼の活動については、詳しい文学史的、伝記的記述は避けることにして、ここではいくつか筆者の関心をひいた点だけを記すことにしたい。

このいわゆる「パリ時代」末期に、レシマンはすぐれたポーランド語詩を数多く書いており、それらは処女詩集『四つ辻の果樹園』（1912）、詩集『草原』（1920）などに収められるが、それと並んで散文の分野でもすぐれた仕事を残した。すなわち、詩と並んで今日非常に高く評価される文学評論の殆ど（ベルグソン論を含む）、『千夜一夜物語』に材を取った、独自の二つの物語集『胡麻伝説』、『舟乗りシンドバッドの冒険』（共に1913）、生前は未発表に終わった、ポーランドの民話に材を取った短篇集『ポーランド伝説集』（1913年頃）などがそれで、また既に触れたポーの短篇の翻訳も1913年に出版されている。このほか詳しくは述べないが、演劇活動にも手を染め、演劇論も発表している。

これらの散文の研究も非常に重要と思われるが、ここでは特に『ポーランド伝説集』についてやや詳しく述べておきたい。

この作品集をレシマンは1913年頃書いたと推定されているが、出版業者との意見の衝突があって、既に述べたように、生前は陽の目を見ることがなかった。その間の事情を語る、1914年頃の彼の書簡の一節を次に見よう。

モルトコヴィチ〔出版業者のこと——引用者注〕が、子供たちのためだと言って『魔女』という題名の私の一篇の伝説に、愚劣きわまりない改変を要求したのです。——何人をも、何物をも顧慮せず、価値ある、全く自分自身のものである散文を創造した、と私には思えます。『伝説集』という総題の下に、かなりの数の興味ある人間像を集め、民衆の暗示から紡ぎ出された、現世と来世とに均等に依拠した芸術性を私は作品に付与したのです。地上と天上と——この二つの天秤の皿の上で、人間の魂の重さを量って見たのです。それぞれの皿が持ち上がるのを、一つ一つ入念に記録しながら。（中略）大人の読者は『伝説集』（お話）を読みそうもない、という風にモルトコヴィチには思われるのです。彼にゴーゴリ、ポー、ホフマンのことを書いてやりました。⁽¹⁶⁾

長々と引用したのは、ここに彼のこの作品集にこめた意図が明瞭にうかがわれるからである。そしてまた、ここに名前が引き合いに出されている三人の外国作家に比肩し得る短篇を書いたという自負も、十分伝わってくるように思われる。特に、最初に名前の挙げられているウクライナ出身のロシア作家ゴーゴリの短篇集『ジカニカ近郷夜話』とこの作品集との類縁を筆者は感ずるのだが、この点についてはいずれ機会を得て書きたいと思う。とは言え、ここに収められている短篇の題名だけでも、内容を髣髴させるために紹介しておこう。『隠者ヤン』、『五月の妖精』、『魔女』、『黒い牡山羊』、『森の精』^{ポドラシヤク}の五篇であり、一部に原稿が失われているための欠損部分があるが、いずれもこの世ならざる存在と人間との交渉を扱った（『魔女』には確かに惚れ葉などという子供向きならざる小道具が現われる）、すぐれた、粒揃いの興味深い作品である。

また、ストーンも言うように、この短篇集でレシマンは、ポーランド版ブリーナを指向し⁽¹⁷⁾

ていたという点にも、彼とロシアとのつながりが色濃く現われていよう。なお、このことと直接関連しないが、引用文中でレシマンが使っている「伝説」と訳したポーランド語 „klechda”⁽¹⁸⁾ は、当時はまだ定着していない謎めいた表現であった。

ところで、『伝説集』が刊行されるのは、レシマンの死（1937）後、20年近くを経た1956年、しかも国外のロンドンにおいてであった。このことと、第一次世界大戦後のレシマン評価の低さとは無縁ではない。レシマンが生前の黙殺に近い状態から一転して再評価されるのは、1950年代後半から本国ポーランドで、詩集、文学評論集、散逸作品・書簡集の三冊から成る本格的な作品集が、相次いで出版されて以後の、たかだか最近二十年余りのことなのである。⁽¹⁹⁾

このことは、今日、英語で読むことのできる二種類のポーランド文学史の記述を比較することでも分るだろう。一つは、1956年に出版された亡命ポーランド人学者、M・クリドルのもので、そこではわずか8行の中に2冊の詩集の名しか挙げられていない。一方、1969年に出た、ノーベル文学賞を後に受けた亡命ポーランド詩人、Cz・ミウォシュによる文学史では、5ページにわたり比較的詳しい説明がなされている（ただし、散文作品に関する記述は少ない）。⁽²¹⁾

さて、本節ではレシマンの生涯の、主としてロシアに関わる部分を見てきたわけであるが、最後に、彼と日本との（ロシアを経由しての）つながりについても、やや詳しく触れておこう。つながりと言っても本当にかすかなものであるが、レシマンは、ソ連で1921年に刊行されたニコライ・コンラドによる『伊勢物語』のロシア語訳を読んでいるのである。⁽²²⁾

レシマンが外国の神話・伝説、古い時代の物語にも広く関心を寄せていたことは、これまでに述べてきたことからある程度うかがえると思うが、今述べたことは、1937年（没年）にワルシャワの日刊紙『ワルシャワ日刊』に掲載された彼の記事「『伊勢物語』」から知られる。この中で彼はコンラドの解説によりつつ、日本古典文学の伝統をポーランドの読者に説明し、『伊勢物語』の有名な「東下り」の段を中心にしたいくつかの段の内容を、ロシア語からさらにポーランド語に訳しながら紹介している。「東下り」の段では、注（22）に示した木村教授の紹介にも触れられている。「かきつばたといふ5文字を句の頭にすえて旅心」をよんだ歌も、宇津という地名をよみ込んだ歌も、日本古典文学の詩的技巧を示す例として特に注目したのであるが、いずれもポーランド語に重訳されて示されているのである。⁽²³⁾

その他、特に注目しておきたいのは、しばらく会わずにいた女の姿を示す、朝日新聞社版日本古典全書本によれば、第24段に見える「かみをかしらにまきあげて」⁽²⁴⁾、また、同じく第58段に見える「ながきかみを、きぬのふくろにいれて」という表現にレシマンが注意していることである。コンラドの翻訳を筆者は参照することができなかったので、そこでどのような訳、注釈が行なわれているのかは詳かではないが、レシマンはこの二つをそれぞれ、「下げ髪を結び上げ」⁽²⁶⁾、「自分の長い下げ髪を絹の織物で（便宜のために）縛り上げ」⁽²⁷⁾（強調は原文）とポーランド語訳している。そして、この二つの個所の間で次のように読者に説明を加えている。

ここでついでに説明しておかなければならないのは、下げ髪を結び上げるのは使用人の女だけであり、淑女はこの時代には長い——分け目のある——肩まで広がった——下げ髪をしていたことである。⁽²⁸⁾

ここで言われていることが当時の風習として確実に言えることなのかどうかはともかくとして、下げ髪(warkocz)という言葉がレシマンの既にその名を示した『ポーランド伝説集』の中の短篇

『五月の妖精』で、印象的な使われ方をしていることが思い出されるのである。この作品の主人公ジューラは、スラヴ伝説に現われるルサールカと類似の存在である人魚の姿をしたマイカという妖精にたぶらかされ、その魔力から逃れようとしても、月夜の晩にマイカの下げ髪が彼を訪れて、つきまとい、悩ます。『ポーランド伝説集』は確かに出版業者が不満をもらした通り、子供のためにならない、地上的ならざる女性的存在と人間存在との恋愛を扱った短篇をいくつか含んでいるが、そのような女性的存在の恨みの一つの象徴として「下げ髪」が登場してくるのである。レシマンは『伊勢物語』の殆ど唯一の内容が、「恋愛と詩的創造」⁽²⁹⁾であると言っているが、以上のようなことを考え合わせると、日本の読者にとってはやや奇異に思える彼の「下げ髪」への興味の示し方も、いく分納得がいくような気がする。

なお、ロシア語訳の底本には朱雀院塗籠本系の刊本が採用されたと思われるが、岩波文庫版などで採用されている定家本には、⁽³⁰⁾以上に見た髪の記事は見当らない。この点でレシマンはある意味で幸運だったと言えないこともない。

さて最後にレシマンは、翻訳による鑑賞上の障害を指摘しなからず、こう述べている。

けれども我々の注意をひくのは、既に10世紀に日本の上層階級の洗練された生活の雰囲気⁽³¹⁾を決定していた、稀有の審美的、感情的文化であり、繊細な芸術性であり、芸術のための芸術というものに対する深い見解である。

ここには、レシマンの異郷、古代に対する憧憬の一端をうかがうことができ興味深い。その意味では、『千夜一夜物語』、『カレワラ』、神話・伝説、フィリーナ、ポー、ゴーゴリ、ホフマン、ボードレールなどへの彼の関心と一脈通ずるものがあるが、彼が没年にこのような記事を残しておいてくれたことに、筆者は愉快的思いを禁じ得ない。

3

レシマンの紹介のために長い前置を置いてしまったが、次に彼のロシア語詩の問題に移ろう。ここでは、前節でも挙げた二つの連作詩について論ずることとする。なお、前節で述べた彼のまとまった作品集がポーランドで公刊される以前に（1955年）、D・チジェフスキはこれら二つの連作詩について先駆的とも言える論文を発表しているので、その後のいくつかのポーランド文献をも参照しつつ（いくつか未見のものがあるので、不備ではあるが）、この研究を検討しながら作品を見て行きたい。

チジェフスキはまず、レシマンと交友のあったバリモントの与えた影響について、その有無を論ずる。結論的には、そのような影響関係を求めてもむなしと彼は言うのだが、その理由として、思想的には、バリモントと異なり、レシマンは強固な道徳的、宗教的基盤に裏付けられた一定の世界観に向う傾向を有していたこと、形式的には、レシマンの詩の特徴は語彙的要素、それも多数の新造語や他の語彙的新奇さに見られるのに対し、バリモントの詩の特徴は音調⁽³²⁾の快美さにあることを挙げる。

このうち、最初の思想的な両者の相違は比較的目につきやすい。バリモントの詩の一種の「無内容さ」というべきものに対し、レシマンの詩には、具体的には自然への回帰、自然との共生というテーマに端的に見られる思想性の存在が確かに感じとられるのである。しかし、二番目の

形式的違いの点については、多少問題がないわけではない。

と言うのは、チジェフスキイが今見た評価に続いて、さらにレシミヤンの詩一般における新造語は、バリモントのそればかりでなく、ベールイの後期散文作品を除くすべてのロシア象徴派に見られる新造語よりも、量と大胆さの点で優っており、むしろフレーブニコフのそれに近い⁽³³⁾としているからである。注意しなければならないのは、最初に、当時読むことのできた唯一のレシミヤンの詩の選集の書名が与えられていることから分るように、チジェフスキイの論文の冒頭近くに現われるこのような新造語に対する高い評価は、実はレシミヤンのポーランド語詩に現われるものを指して言われているのであって、ロシア語におけるものに対してではないということである。

ところが、ポーランドの研究者S・ポルラクは、この文脈を無視して、レシミヤンにとってのロシア語は結局外国語であって、具体物とのつながりを欠いたものだったとし、彼のロシア語詩における新造語は、彼にとってのロシア語の「非有機性」から生じた結果にすぎない、とチジェフスキイに反論⁽³⁴⁾している。ポルラクのこの主張自体については、後に具体的に検討するが、このように論点がうまくかみ合っていない理由として想像されるのは、恐らく彼がチジェフスキイの論文を直接には読んでおらず、チジェフスキイと並んでやはり批判の標的にしているチシュナデル⁽³⁵⁾の論文に現われた引用によって、一部を読んだだけであつたのではないかということである。まして、チジェフスキイ自身、少なくともレシミヤンのロシア語詩における新造語については、それほど大胆なものではないことを別の個所⁽³⁶⁾で認めているのであるから。

議論が脇道にそれてしまったが、結局、チジェフスキイはバリモントの詩の影響の問題を、レシミヤンのロシア語詩をも含めた彼の詩一般について論じ、影響を否定的に考えているわけで、筆者もその意見は妥当であると考え。それは、レシミヤンのロシア語詩に現われる語法、イメージが、バリモントとの関係でとらえるよりも、後のレシミヤン自身のポーランド語詩との関係で考えた方が理解しやすいことによるのであるが、その点については後に論ずる。

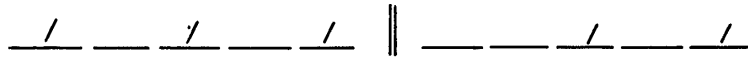
もう一つ、バリモントの影響の問題に関して、チジェフスキイとポルラクの意見が対立するのは、連作詩『月の酔い』についてである。チジェフスキイは表題、主題（月）などの面でのバリモントとのつながりを一応認めるが、内容の面では、バリモントにおける月が風景の一要素にし過ぎないのに対し、レシミヤンの詩では、月をめぐる一つの神話が紡ぎ出されているために、両者は殆ど共通性を持っていないとする。これに対しポルラクは主題上のつながりをチジェフスキイ以上⁽³⁷⁾に重視⁽³⁸⁾する。

二人の研究者の意見の相違は、力点の置き方にあるのに過ぎないとも考えられるが、筆者は、ここでもチジェフスキイの意見に妥当性を認めたい。

以上に見てきたことを具体的に論証することとも関連するが、筆者は以下に、レシミヤンのロシア語詩における新造語の問題を具体的に取り上げ、次に作中で頻りに現われる「夢・眠り」を同時に意味する多義語《сон》の使われ方の問題について論ずることとするが、その前に作品の形式の問題に簡単に触れておきたい。

チジェフスキイは前述の論文の中で、全部で11篇に達するロシア語詩の韻律、押韻などについて、レシミヤンほかのポーランド語詩とも比較しながら詳細に報告している。これは当時『金羊毛』『天秤』のような雑誌が閲覧し難い文献だったこと、レシミヤンの作品自体が十分な刊本を持っていなかったことにもよっていると思われる。このうち、問題となるのは『月の酔い』の二番目の詩『速やかな夢』の形式である。この詩は九連から成り、各連は二行の互いに男性韻を踏む十

音節の詩行から成っている。このような形式は珍しいとは言え、チジェフスキイも言うように⁽³⁹⁾、ポーランド詩の伝統の中にも見出され、またバリモントも愛用したものである。だが特異なのはその韻律であって、チジェフスキイは次のような図式を立てている。



すなわち、三つの強弱格の後に、二つの弱強格が続き、三つ目の力点の後に二つの無力点の音節が置かれ、三つ目の力点の後には常に中間休止があるというものである⁽⁴⁰⁾。

このような異種の韻律の結合による形式は、一般的にはいわゆるアクセント詩の特殊な例と見なすことができるが、たとえばB・O・ウンベガウンのロシア詩法書には、二歩格と三歩格の結合についてしか説かれていないので、これはさらに特殊な例ということになろう。しかしこの図式の難点は、各行の一つ目の力点が、殆どすべて一音節の人称代名詞、所有代名詞、接続詞で表わされており、常に力点が置かれているとは考え難いことである(チジェフスキイ自身も、他のロシア語詩の図式では、このような強引なことはしていない)。従って、筆者は次のような図式も可能であり、また適切であると考える。



すなわち、中間休止を中心にして、弱弱強格と弱強格との結合が左右対称をなしていると解するのである。もちろん、このような変則的な韻律では二様の解釈があり得ることはむしろ当然であるが、チジェフスキイがその可能性について触れていないのは奇異の念を抱かせるし、実際に詩を読むと、一つ目の音節が常に弱いために、中間休止を境として、前半の韻律が後半で再び繰返されているという印象が強い。このことは、前半の半行の内容を後半の半行が言い換えている例、

Сон приснился ей, сон по ней плывет!

あるいは、対比している例、

Я приснился вдруг, но не вдруг исчез.

がいくつか見られることにもよってしよう。

いずれにせよ、各行の半行の韻律は非常に強固で、この詩が変則的であるとは殆ど気づかれないかもしれないほどなのである。

レシマンの他のロシア語詩は伝統的な韻律によっており、この面での新奇さは殆ど無いと言ってよい。元来レシマンは韻律の面ではポーランド語詩においても保守的であったが、晩年の論文『詩に関する考察』で、彼は同時代のロシア詩の革新に触れて、次のように述べている。

ここでついでに付け加えておけば、ロシア・アクセント詩が韻脚に加えた打撃というものは、それにとっては改革であるものの、韻律の点で自由な音節詩にとっては、何ら創意ある変化では

ない。音節詩はようやくその改革者を待っているところなのだ。⁽⁴²⁾

いわゆるアクセント詩はロシア詩のみならず、ポーランド詩においても20世紀に形成された形式であるが、ここに見られるように、レシマンはこの形式を認めず、もっぱら伝統的な音節詩と、音節アクセント詩の形式を用いた。この点でレシマンはポーランド未来派からは遠いとも考えられるが、先に見た図式を持つ詩でも、彼はアクセント詩の一変種を作ろうとしていたというより、むしろ音節詩の側に傾いていたのかもしれないのである（晩年の論文と若書きの詩を比べることの無理はあるが）。

次にレシマンの新造語について述べよう。ここではそれ以外に語の転義的使用なども含めて考えてみたが、チジェフスキとポルラクは、既に触れた論文の中で、前者は網羅的に、後者は、彼によれば、「ポーランド語風語法」(polonizm)の例を中心に、それぞれ論じているので、ここでは新造語の問題について詳述を繰り返すことは避け、比較的注目に値する例を、二人が挙げていないものも含めて示し、次に、ポルラクのいくつかの例を検討してみたい。

まず、新造語とは言えないが、『歌』では、いくつかの民話、民謡風の表現、あるいは古語が現われる。《матушка-лазурь》、《за тридевять земель》、《заоблачная твердь》、《утро красное》、《намедни》、《у красных у ворот》などがそれであって、『歌』が民話に材を取ったこととこれらの表現とはつながりがある。最初の例のような「二重語」はほかにもいくつか見られ、これは新造語に含めることも可能であろう。このほか、諺風の言い回し、《игра - заботы мудренее》も合せて考えることができよう。

チジェフスキが『歌』における唯一の名詞の新造語としている《нелюбовь》⁽⁴³⁾は、辞書に記載されている言葉であって、新造語とは考えられない。ただし、

Обильно-сладкая, святая нелюбовь!...

(.....)

И замираю вся от нежной нелюбви!...

の例に見られるように、形容詞と名詞《нелюбовь》の間には一種の撞着が生じており、名詞に《не-》のような接頭辞を付けて事物の非在を示す、レシマンに特有の造語法の現われと見ることもできよう。⁽⁴⁴⁾

『歌』にはこのほかにも注目すべき形容詞と名詞の結合例が現われる（先の「二重語」もその中に含まれよう）。《солнечная быль》、《водоветный сон упругого весла》、жемчужная суматоха Невольно-пенных волн, заплетенных в венец》、《догадливая бровь》、《неслышное пламя》、《благодарный гром》などがその例だが、最後の二例の共感覚的結合、また無生物に擬するとらえ方など、レシマンの詩におけるこのような異種のイメージの意外な結合には、詩の話者「私」と自然との親密な共生状態が読み取れるのである。

連作詩『月の酔い』では、新造語は比較的少ない。《мрак-звездопоклонник》のような「二重語」、あるいは《по таким, по ночам》のような言い回しはブイリーナを思わせる。なお、前者は数少ない新造語の一つである。

このほか、前と同様、いくつかの自然との交感を示す意外な形容詞と名詞の結合例を挙げれば、

《прихотливая луна》, 《река беззаботная》, 《ночь видна и ночь слышна》, 《солнце влажное》などがあるが、その数はさほど多くはない。

ところで、レシマンのロシア語詩における語法の問題を考える場合、当然、レシマンがポーランド人であったことと関係があるのではないかという疑問が生ずる。この点について、チジェフスキはレシマンのロシア語詩の中には外国人らしさは感じられないとしているが、⁽⁴⁵⁾ポルラクは先にも触れたように、レシマンの奇妙な新造語の原因として、彼にとってロシア語が外国語であったことを主張する。⁽⁴⁶⁾

しかし、ポルラクの挙げるポロニスムの例のうち、《любовней》, 《бессонней》, 《слышнее》, 《золотей》などの形容詞比較級がロシア語にはないからポロニスムだ、と言うのは暴論で、百歩譲ってたとえそのような言い方がロシア語にはないとしても、ポーランド語にあるわけではない。また、『月の酔い』の中の次の例、

Привольней облакам блестится и живется,

に現われる《блестится》についても、確かにポーランド語には „błyszczec się” という語があるにしても、この動詞には詩中で使われている非人称の用法がないので、やはりポロニスムとは言えないと思われる。これはやはり、直後に現われる《живется》に類似の新造語と解すべきであろう。そして、最後に挙げられている、『月の酔い』

Я люблю веслом заглянуть ко дну,

の詩句に現われる構文を、ポルラクは明瞭なポロニスムだとする（構文的に、前置詞の選択が誤っていると暗示していると思われる）が、ポーランド語ではこの場合に対応する前置詞 „ku” は用いられない上に、この詩句の意味は、「私 [= 夢] は、橈の姿となって水底に立ち寄ることを好む」と解し得る（「水底をのぞきこむ」よりはむしろ）ので、誤用法とも言い切れないと思われる。つまり、ここでは「橈」も「水底」も擬人化されており、「私 = 夢」が無生物たちと交感状態にあるのであって、このことは、「橈」が仲間の「水底」や「小舟」の夢を見る、という同様の内容を持つレシマンのポーランド語詩の表現 „Śni się wiosłom—dno i łodka” (Pan Błyszczynski) , あるいは、やはり同じ「橈の夢」が現われる、『歌』の中の既に引いた形容詞と名詞の結合例、および、ポーランド語詩の詩句 „Przez las biegnie sen wiosł o słońcu na fali —” (Zielona godzina) などを思い出せば明らかになると思われる（レシマンの自然観をロシア語詩とポーランド語詩とで区別する理由はない）。

従って、ポルラクはあまりにレシマンをポーランド側に引きつけ過ぎており、彼のロシア語詩を正当には評価していないように思われる。語法の面では、たとえいかに奇妙に見えようと、彼のロシア語詩はロシア語の範囲内で論ずることが可能だと思われるのである。

ところで、今上に見た「夢」という言葉は、レシマンのロシア語詩においても重要な鍵語であると思われるので、最後に簡単に述べておこう。

「夢」と「眠り」を同時に意味するポーランド語 „sen” が、レシマンの想像力の源を読み解く大きな手がかりの一つであることは、しばしば指摘されており、たとえばクシジャノフスキ

は詩集『四つ辻の果樹園』の最初の30葉に、このモチーフが30回以上現われることなどを指摘している⁽⁴⁷⁾。またごく最近、M・グウォヴィンスキは、レシジャンのポーランド語詩に現われる「夢=眠り」に関する研究論文を完成させた⁽⁴⁸⁾。

レシジャンのロシア語詩もまた例外ではなく、対応するロシア語《сон》が頻出することに気づかずにはいられない。具体的に数字で示せば、今問題にしている11篇の詩の全行数220行中には、《полусон》などの派生語も含め（表題に現われる分は除き）、29回現われており、1回も現われない詩は、『歌』の2、4番目の2篇に過ぎないのである。

グウォヴィンスキはレシジャンのポーランド語詩に現われる“sen”の意味内容を7つに分類している（ここでは詳述は避ける）が、ロシア語詩に現われる《сон》も、いくつかのタイプに分けることができる。『歌』からいくつか拾っていけば、第1篇の既に触れた無生物の見る「夢」としての「橈の夢」は、「花々の思考」、「月光の思い」と並列されており、第3篇には、月がまどろんでいる状態としての《сон》が現われている。しかし最も重要なのは、第5篇での、次に挙げる例である。

Я та, которой нет - но есть мои мечтанья,

(.....)

И Богу я могу присниться в небесах!

(.....)

Я только сон во сне! Я - бред в твоей крови!

Но мною бредит лес, (.....)

ここでは「私」は「神」に夢見られる存在であり（世界は「神」の夢に等しい）、同時に自身も「夢=眠り」であることから、《сон во сне》という表現が現われてくる。最後の1節に見られるように、「私」は自然の存在である「森」によって夢見られる（ここでは《бредит》という言葉が使われているが）存在でもあるわけで、このような所にはレシジャンの民話にその源泉を持つ汎神論的世界が鮮明に見てとれるのである。

『月の酔い』では、この言葉はより多用されている。第1篇『夜』では、まず夜の闇の中でこそはっきり見えてくる存在として、《Теперь - виднее сон》と言われているが、中でも最も興味深いのは、既に表題にこの言葉を持つ第2篇『速やかな夢』である。ここでは、「私=夢」が既に触れたように「橈」となって水の中に潜り、

Сон приснился ей [луне], сон по ней плывет!

という前にも引いた詩句の二重の夢の表現から分るように、水に映る月の上を泳ぐ。そして最終の2行、

Я уже не твой, я не друг тоски, -

Я - свободный Сон голубой реки!.....

で分るように、「私」は「お前」の見る眠りの中に現われる従属した「夢」なのではなく、「自由な」独立した、大文字で始まる、「川の」「夢」、つまり、妖精的存在と化するのである。

この詩に現われる奇妙な、生き物のような「夢」、グウォヴィンスキの表現によれば「自然要素としての夢」は、成熟期のレシマンのポーランド語詩に多く現われるが、最初期に属するロシア語詩の中に、既に十分なものとして原形を現わしているのである。このように見えてくると、レシマンのロシア語詩は、他のバリモントなどのロシア詩人よりも、むしろ、当然の話と言えが、自身の後期のポーランド語詩と太い糸で結ばれていると考えざるを得ない。

最後に一応の結論を出しておくとして、(1)、レシマンのロシア語詩の語法上の問題は、ロシア語の問題としてとらえることが可能であること、しかし、(2)、詩形式、およびイメージの問題については、彼の後のポーランド語詩との関連においてとらえること、チジェフスキの言う、レシマンの「自己影響」の第2の問題である、後期ポーランド語詩とロシア語詩との関係の問題の解明が必要なこと、以上の2点になるだろう。第2点については「夢」という言葉が大きな手がかりを与えてくれるように思うが、本格的な彼のポーランド語詩研究が残された筆者の大きな課題となる。⁽⁵²⁾

注

- (1) Cf. Donchin, G., The Influence of French Symbolism on Russian Poetry, 'S-Gravenhague, 1958, p. 52.
- (2) Stone, R., Bolesław Leśmian : The Poet and His Poetry, Berkeley - Los Angeles, 1976, p. 151.
- (3) Cf. *ibid.*, p. 293.
- (4) Leśmian, B., Utwory rozproszone, Listy, Warszawa, 1962, s. 347.
- (5) 注(4)で示した書簡に付された注で、ポーランドの代表的レシマン研究者、J・チシュナデルは78年説を主張し(同書394頁)、別の論文でも同じことを述べた。しかし、その後刊行されたレシマンの選詩集への序文では、77年説に転向している。
Por. Trznadel, J., Bolesław Leśmian, (w:) Literatura okresu Młodej Polski, T.I, Warszawa, 1968, s. 831; Tenże, Wstęp, (do:) Leśmian, B., Poezje wybrane, Wrocław-Warszawa-Kraków-Gdańsk, 1974, s. III.
- (6) Trznadel, J., Wstęp, s. IV. なお、詳述は避けるが、ここで引用されているレシマンの言葉に、彼の場合、珍しいことではないが、いわゆるロシア語風語法(rusycyzm)が混入しているのは興味深い。
- (7) Stone, R., *op. cit.*, p. 6, p. 292.
- (8) Grossman, J.D., Edgar Allan Poe in Russia: A Study in Legend and Literary Influence, Würzburg, 1973, pp. 34-35, p. 221.
- (9) Krzyżanowski, J., Dzieje literatury polskiej, wyd. 2, Warszawa, 1972, s. 374.
- (10) Faleński, F., Z daleka i z bliska, (w:) Wybór utworów, Wrocław-Warszawa-Kraków-Gdańsk, 1971, s. 331-411.
- (11) Stone, R., *op. cit.*, p. 7, p. 293.

- (12) Leśmian, B., Utwory rozproszone, Listy, s. 74-79, s. 82-93.
- (13) Stone, R., op. cit., p. 151
- (14) *ibid.*, p. 150.
- (15) Trznadel, J., Bolesław Leśmian, s. 833.
- (16) Leśmian, B., Utwory rozproszone, Listy, s. 338.
- (17) Stone, R., op. cit., p. 8.
- (18) Por. Słownik folkloru polskiego, (pod red.) Krzyżanowski, J., Warszawa, 1965, s. 168-169.
- (19) レシマン生誕百年にあたる1977年から9年にかけて、筆者はちょうどワルシャワに留学中だったが、前記の三つの物語・短篇集がこの間に再刊されたものの、本格的な詩集はついに刊行されなかった。ポーランドの特異な人気歌手、エヴァ・デマルチクの数少ないレコードの中に、レシマンの詩『傀儡』を歌詞にした曲を含む一枚があるが、まだ彼は一般的な詩人とは言えないのかもしれない。
- (20) Kridl, M., A Survey of Polish Literature and Culture, The Hague - Paris, 1956, p. 417.
- (21) Miłosz, Cz., The History of Polish Literature, New York, 1969, pp. 347-351.
このほかに、注(9)に示したJ・クシジャノフスキの文学史の英訳もあるが、これはここでは英語による文学史の中に含めないこととする。
- (22) この翻訳については、木村彰一、「ニコライ・コンラドによる『伊勢物語』の露訳」、『ロシア手帖』第1号、昭和46年、22~24頁参照。
- (23) 同書、23~24頁
- (24) 朝日新聞社版日本古典全書「竹取物語・伊勢物語」、286頁。
- (25) 同書、310頁。
- (26) Leśmian, B., Szkice literackie, Warszawa, 1959, s. 472.
- (27) *ibid.*, s. 473.
- (28) *ibid.*
- (29) *ibid.*
- (30) この点について、山形大学教養部講師、神山重彦氏の懇篤な御教示をいただいた。
- (31) Leśmian, B., Szkice literackie, s. 474.
- (32) Čyževskýj, D., Zu den polnisch-russischen literarischen Beziehungen, 2. Bolesław Leśmian als russischer Dichter, „Zeitschrift für slavische Philologie“, vol. XXIII, Heiderberg, 1955, S. 261.
- (33) *ibid.*, S. 261.
- (34) Pollak, S., Niektóre problemy symbolizmu rosyjskiego a wiersze rosyjskie Leśmiana, (w:) Srebrny wiek i później, Warszawa, 1971, s. 258-259.
- (35) Trznadel, J., Rosyjskie wiersze Leśmiana, „Twórczość“, 1961, nr 1. ただし、筆者はこの論文を未見。
- (36) Čyževskýj, D., op. cit. S. 263, S. 267.
- (37) *ibid.* S. 264-265

- (38) Pollak, S., op. cit. s. 255-257.
- (39) Čyževskýj, D., op. cit., S. 265.
- (40) ibid.,
- (41) Unbegaun, B.O., Russian Versification, London, 1956, pp. 92-93.
- (42) Leśmian, B., Szkice literackie, s. 88.
- (43) Čyževskýj, D., op. cit., S. 263.
- (44) Cf. Stone, R., op. cit., p. 117.
- (45) Čyževskýj, D., op. cit., S. 267.
- (46) Pollak, S., op. cit., s. 259.
- (47) Krzyżanowski, J., Neoromantyzm polski, 1890-1918, Wrocław-Warszawa-Kraków-Gdańsk, 1971, s. 143.
- (48) Głowinski, M., Leśmian-sen, (w:) Zaświat przedstawiony : Szkice o poezji Bolesława Lesmiana, Warszawa, 1981, s. 205-229.
- (49) ibid., s. 206-216.
- (50) ibid., s. 211
- (51) Čyževskýj, D., op. cit., S. 262.
- (52) 本稿脱稿後に下記論文を読む機会を得た。

Ровнякова Л.И., Русские ситхи Болеслава Лесьмяна (к проблеме русско-польского билингвизма). — В кн.: Многоязычие и литературное творчество, Л., 1981, стр. 290-315.

この論者が大脳生理学を援用してレシマンの二か国語使用に取組んだ点には新味がある。また、レシマンのロシア語が、母国語でなかった故に獲得した意義を、論者が認めている(同書314~315頁)点に、筆者は共感を覚える。